

フランス国立図書館蔵「酒飯論絵巻」の特徴と文化庁本の翻刻（共同研究報告）

伊 藤 信 博

他 共同研究メンバー

一 はじめに

十六世紀中葉頃に制作されたとされる「酒飯論絵巻」は、狩野元信系諸本と伝土佐光元筆の伝承を持つ系統とに大別される作品で、「下戸上戸絵詞」、「三論絵詞」、「酒食論」、「上戸下戸之巻」もこの絵巻の別称である。公家であり、酒好きの造酒正糟屋朝臣長持、水漬け飯を好む僧侶飯室律師好飯、酒も飯も程々がよいとする、つまり、中庸を重んじる武士の中左衛門太夫中原仲成が持論を展開する詞書を持つ一巻本の絵巻である。主となる絵巻の構成は四段で、詞書に続いて、飯室好飯の住房で三人が語り合う様子、糟屋長持の住居での酒宴、飯室好飯、そして中原仲成の客を交えた食事や厨房の様子がそれぞれに描かれる内容となっている。

この絵巻は静嘉堂文庫美術館（一軸、紙本着色、貞享元年（一

六八四）の土佐光起識語「土佐左近将監光元真筆」、国立国会図書館A（一軸、彩色）、国立国会図書館B（一軸、紙本墨画、一部着色、色指示、印記、内海蔵本、「絵土佐光元筆 詞兼載法師筆」、文化庁（一軸、紙本着色、十六世紀中期）、愛媛県歴史博物館（紙本着色、二軸、紙本淡彩、十六世紀末〜十七世紀初頭）、茶道資料館、三時知恩寺、東京国立博物館、群馬県立歴史資料館など、国内では約三十の美術館や図書館が模本・版本を所蔵している。

海外でも、ニューヨーク・パブリックライブラリー・スペインサーコレクシオン、チェスタービーティ・ライブラリー、イギリス大英博物館、フランス国立図書館、ギメ美術館等が所蔵しており、内外どちらの模本・版本の制作年代も多岐に渡っている。

このように、多くの異本・模本が存在しているにも関わらず、研究対象として取り上げているのは、美術史の並木誠士氏を筆頭にわずかな研究者のみである。文学研究はほとんどなく、飲食、

宴会、厨房が描かれ、調度品を含め、下男・下女・従者達の服装などの社会風俗史、食文化研究には貴重な資料であると多くの研究者が言及しているにも関わらず、詳細な研究の対象になってはいないのが現状である。

ところで、二〇〇九年九月から二〇一二年十一月まで、フランス国立図書館、国立東洋言語文化大学の日本研究センター、パリ・デイドロ大学の東アジア文化研究センターによって「フランス国立図書館写本室およびフランス国内に所蔵される江戸時代における日本物語絵写本」研究プロジェクトが実施され、ヴェロニク・ペランジェ氏（国立図書館写本室）、エステル・レジエリ・ポエール氏（国立東洋言語文化大学）、クレール・碧子・ブリッセ氏（パリ・デイドロ大学）を中心としたフランス人研究者により、詞書を欠き、画だけが残るフランス国立図書館写本室蔵「酒飯論絵巻」総合研究が行われた。

そして、セルヌスキ美術館、フランス人間科学研究所を含め、わが国では、慶応大学、立教大学、名古屋大学など多くの研究機関が研究協力を行い、フランス国立図書館蔵本を茶道資料館本や文化庁本、他の海外蔵本との詳細な比較研究を行った。その結果、画の繋ぎ紙の長さに共通点があることや色彩などの類似点から東博本に一番近い模本であり、制作年代は江戸中期頃で、東博本より完成度が高い作品であると考える結果にいたったのである。

る。

このような研究と平行し、フランス国立図書館蔵本は詞書を欠くため、写本としては一番古いとされる文化庁本の翻刻を行った。そこで、この研究会に当初から携わった筆者として、本稿では「酒飯論絵巻」の特徴を考察すると共に、共同研究の成果である文化庁本の翻刻を紹介したいと考えたのである。

二、「酒飯論絵巻」の特徴

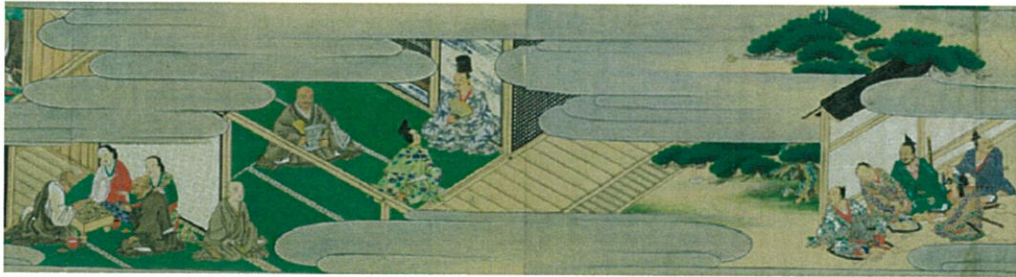
「酒飯論絵巻」は、第一段の詞書と画の後に、パロディ風に主要な三つの段が、詞書、画と続く。それぞれの段の画は、宴の様子と宴に対応する厨房での準備風景が描かれ、読む側にとって、宴の場面と厨房との間に描かれる「料理」の関係をどのように考察するかが重要な点となっている。

第一段では、好飯の住居の外と内に続き、三人の主要な登場人物を紹介する。公家で酒好きの造酒正糟屋朝臣長持、僧侶で、水漬飯を好む飯室律師好飯、そして武士で酒も飯も程々にたしなむ、つまり中庸を代表する中左衛門太夫中原仲成が好飯の住居で話し合いをする場面である（図一）。この場面の後に、茶を挽く場面、米を蒸すための準備場面が同一画面に描かれる。なお、季節は春である。

第二段は、長持家の内部情景が描かれる。季節は夏である。ここでは壮大な酒宴を描き、酒の優位性を表し、続く場面では、酒の準備風景や悪酔いして嘔吐する人物などが描かれる(図二)。また、酒樽が描かれる上部の部屋には、奥に鮎が干してあり、すぐ下には、納豆、それから筍、アブラナ科の若菜が描かれている^三。

第三段は、再び好飯の住房で、季節は秋となる。ここでは好飯の食事風景が描かれており、続く場面では、米を原料とする菓子を含め、餅作りなどの調理風景が描かれる(図三)。また、廊下には、強飯と水漬け飯に入れる具と思われるものを運ぶ二人の人物も描かれている。

第四段は仲成家の食事風景で、季節は冬であり、調理場面では、鯉や鴨または雁の調理場面、料理、汁、



図一、フランス国立図書館蔵。第一段、主人公達、好飯僧坊、部分



図二、フランス国立図書館蔵。第二段、仲成宅での酒宴と酒の準備、部分



図三、フランス国立図書館蔵。第三段、好飯僧坊での調理場面、部分



図四、フランス国立図書館蔵。第四段、仲成宅での調理場面、部分

果物などが準備されている。

この絵巻は各段が同様の配置、すなわち主人公の場面や料理の場面、そして食材の調理場面が交互に表されるといふ配置になっており、画は詞書を補助して物語を語るのではなく、食事場面やその準備も主体のように描かれている。加えて、それぞれの段に描かれる下男下女達、従者達の服装の柄や背景に描かれる襖や花瓶などの調度品の絵柄、庭の植え込みなどが春・夏・秋・冬と各段における季節を示しており、下男下女にも多くの画面を費やし、他の場面と並置させている。

また、この絵巻の詞書は、七五調の和文で記され、序文と、三人の中心人物による持論展開、すなわち、造酒正糟屋朝臣長持は酒を擁護し、飯室律師好飯は酒飲みを批判して、飯を基本とする食事を賞賛する、そして中左衛門大夫中原仲成は、どちらも程々に中庸を重んじる持論を展開する場面で構成されている。しかし、詞書は三人の持論を並置し、登場人物同士の対話もない構成であり、同時期に制作された他の絵巻とはかなり異なっている。

序の詞書では「いづれもとどりに言葉を尽くして歌をよみ」とし、各段の詞書では、「新酒も古酒も酔いぬれば念仏宗をぞ深く頼める」(長持)、「五味の調熟事ふりて猶味ははむ法喜禅悦」(好飯)、「世の中に住む仲成が心中に中道の理を悟りぬるかな」(仲成)とそれぞれの宗派を示す文言が和歌で終わる形となつて

おり、念仏宗、法華宗、天台宗を主人公たちは代表していることがわかる。

そして、詞書の中には、日本や中国の古典（『源氏物語』、『狭衣物語』、『伊勢物語』、『白氏文集』、『史記』などを援用し、擬古文風に記し、様々な言葉遊びも展開させている。一方、室町を代表するような「物尽くし」も記されており、その言葉遊びの部分、特に料理が各段で図像化されているのである。

以上述べてきたように、僧侶の住房で三人が語り合う様子、公家の住居での酒宴、僧侶および武士の食事、それぞれの厨房風景の四段で構成されるこの絵巻には、同時代に制作された他の絵巻にはみられない幾つかの特徴がある。すなわち、食事や酒宴、厨房での調理場面が綿密に描かれ、主題となっており、詞書と画に関連性が少ないこと、詞書自体も持論が並置されることなどである。

また、それぞれの段に描かれる下男下女・従者達、の服装の柄や背景に描かれる調度品の絵柄、庭の植え込み、調理の材料などが春夏秋冬と各段における季節を示していることに加え、それぞれの家でくつろぐ人々や働く人々が主人公達と並置される画の構成も詞書と同様に同時代にはないこの絵巻の特徴である。

この「酒飯論絵巻」の別称に「下戸・上戸」、「酒・食」とあるように、二つの対照的な事物の優劣争いを主題とする物語は室町

時代にはかなり多い。伝二条良基（一三二〇～一三八八）による『餅酒歌合』、仁岫宗寿による大永五年（一五二五）の『梅松論』、お伽草子の『異類物』である『虫歌合』、『鴉鷲合戦物語』、『鳥歌合』、『隠れ里』、『鳥羽画巻物之内合屁戦』、『墨染桜』、『十二類合戦絵巻』、能の謡曲『花軍』、その替間である狂言の『菓争』^四も同様である。

このような作品群は中国・明代にも多く創作された。『風月争奇』、『花鳥争奇』、『山水争奇』、『蔬果争奇』、『梅雪争奇』、『童婉争奇』などが代表例で、「異類論争物」あるいは「争奇類」と称されており、日本・中国ともに禅林での創作で、類似性が指摘され、同系統の作品群とも考えられている^五。そして、その違いは、中国では、上位に立つまたは両方に共通点を持つ仲介者、例えば、酒もお茶も水できているからと仲介者の水が争いを収める中国の『酒茶論』のように、勝負がはっきりしないのが普通である。

そして、既に述べてきたように、「酒飯論絵巻」は他の多くの必ず勝ち負けのある争いを主題とした作品とは相違し、「優劣争い」が明確には現れていないのが特徴の一ついえる。もともと、詞書による彼らの持論展開では、長持は「阿弥陀」、好飯は「法華経」、仲成は「即身成仏」で終わっており、念仏宗、法華宗、天台宗の宗派間の論議も重ねられている可能性も指摘される^六。

身延山にお参りした法華宗の僧侶と善光寺帰りの念仏宗に僧侶が対話形式で争う狂言『宗論』の成立にもそのような背景があるであろう^七。

京都では、法華宗の台頭が一五二〇年代前半にあり、天台宗との対立が起こっていた。また、一向宗、法華宗は共に台頭した商工業者とその支持基盤にあり、天文元年（一五三二）には、京都の町衆が中心となった法華一揆により山科本願寺が焼き討ちにあうのである。そして、天文五年（一五三六）には、天台宗は興福寺、本願寺と共に法華宗と争い、洛中の法華宗二十一本山が、全て炎上する史実もあり、この争いは天文十六年（一五四三）年まで続いている^八。

ところが、「酒飯論絵巻」が語る内容は、例えばお伽草紙の『墨染桜』のような戦争、切腹、出家のようなドラマチックな展開とはかなり相違しているのであり、争いといっても、論争に過ぎない。第一段では長持、好飯、仲成の人物紹介があり、第二段では、長持が酒の徳を説き、下戸に対する批判を行うが、酒の長所が前面に出ている。第三段では好飯が古今の文学作品から例を挙げ、酒による悪弊を語り、酒の批判を展開するが、「飯」の美味さ、お茶の楽しさが主題の中心となっている。第四段では仲成が「飲まないのも飲み過ぎも、良くない」と語るのみで、中庸さを褒め称えることに始終している。

つまり、絵巻の内容からは、歴史を反映する宗派間の争いは明確にはみえてこないのである。念仏宗、法華宗が共に天台宗から分かれた宗派であること、仲成が中庸を説き、天台宗を象徴している点に鑑みれば、執着心をなくし、公平に現実を見極めることで、判断や行動をなすとする天台宗の中道説の洒落、または優位性を説くとも考えられる。

一方、画には好飯宅門前に描かれる従者、好飯の住房で三人が語り合う様子、長持の住居での酒宴、好飯と仲成の食事の光景が台所での準備風景、配膳風景と共に、並置され、丁寧に描き込まれている。このような食事背景を描いている画は、この時代には、この絵巻以外では「異類婚譚」を語る「鼠の草子絵巻」や「春日権現絵巻」、「慕婦絵詞」や「十界図屏風」を挙げる事ができるくらいである。

そして、第三段では、食材も季節ごとに行われる節会の食材が毎日用意されているかのように、一つの場面に同時に描かれており、祝祭の大饗宴となっていることもこの絵巻の特徴である。加えて、上述したように、この絵巻は背景に描かれる植物、人物の服装も春、夏、秋と特定の季節の図柄で構成されていることから、季節と画の関係も気になるのである。

また、第二段に描かれる酒宴や遊芸の豪華さ、第三段に描かれる飯の高盛の様子は、招待客に対する当時の当然の対応が描かれ



図五、図六、フランス国立図書館蔵。第三段と第四段の食量差異、部分

ていると思われる。ところが、第四段では、中庸を重んじるとされているためか、客に対する飯や料理の盛りも当時の客のもてなし方とは対応せず、続く調理場面の豪華さとは対照的である（図四、図五、図六）。

この場合、念仏宗、法華宗からの天台宗に対する吝嗇への批判とも取れるのである。歴史的にみれば、「応仁の乱」以前には天台宗徒である日枝神人がこの絵巻に描かれるような米や食材の流通を独占していた。朝廷および幕府の双方が衰えてきた「応仁の乱」以降は、新勢力（念仏宗および法華宗宗徒）が流通を支配し始めたのであり、その争いが反映していると理解するこ

ともできるのである。

一方、この絵巻の次の特徴には、上述してきたように、台所で働く人々や従者の姿が積極的に描かれていることが挙げられる。このような絵巻の代表的なものには「信貴山縁起絵巻」や「一遍聖絵」がある。ところが、これらの絵巻は絵画化する目的の主題があり、その主題を強調するために、その背後に点景のように人々が描かれるのである。

「月次絵」や「名所絵」にも人々が描かれるが、この場合も、主題は月毎に繰り返される行事や普遍的な「名所」に現れる人々の点景描写であって、必ずしも、画家が積極的に人々を描くという欲求ではない。「鼠の草子絵巻」も婚礼という行事を描く主題に鑑みれば、働く人々が様々に描かれていたとしても「月次絵」と同様の行事、つまり婚礼が主題の中心なのである。

また、上述したように「酒飯論絵巻」の特徴は詞書が忠実に絵画化されていないことにある。社寺建立の由来や本

柏屋朝臣長持	飯室好飯	中原仲成
酒	飯	中庸
公家	僧	武士
夏（タンポポ等）	秋（蓮等）	冬（鴨等）
念仏	法華	天台

各場面の比較表

尊の靈験を説く十五世紀後半～十六世紀前半に数多く制作された「縁起絵巻」は、客観化された詞書が画と併せて、その主題を鑑賞者に訴えかける作品群であった。

一方、十六世紀～十七世紀に盛んに制作された詞書のない「参詣曼荼羅」には案内役の主題となる人物が幾度も繰り返し描かれ、鑑賞者を誘導する。そして、主体的に「絵解き」を行うことで、神域などへの参拝、信仰を鑑賞者に直接的に働きかける役割を持っていた。このジャンルにも、人々は多く描かれたが、やはり、神域の賑わいや主題となる人物を誇張するために置かれた点景に過ぎなかったのである。

ところが、このような詞書と画の双方によって、あるいは「絵解き」により、何らかの主題が浮かび上がるといった手法を取らず、ストーリー性や文学的要素が欠けている「酒飯論絵巻」の特徴は、絵画的であるといえる。和語で記され、「食」を描くとはいつても、禅宗において、画の題材になるような風景を描き、その画に漢詩の賛を入れ、書画一致の理想を追求した詩画軸を思わせる趣さえ感じさせるのである。

この点においては、この「酒飯論絵巻」が禅林での影響の下に成立した「異類論争物」と同系列であると考察することは可能であり、台所で働く人々や従者の姿が積極的に描かれている点においては、この絵巻の作者は新しい主題の開拓者であったと考える

ことができる。そして、その背景には町衆の勃興と新しい宗派が絡む京都の新たな歴史の動きを反映しており、平和への強い願いも画に映し出されていると思われるのである。

さて、この絵巻の特徴をまとめると以下ようになる。

(一) 料理の場面と、食材の調理場面が交互に表されるといふ配置から、画は物語を語るのではなく、完全に食事が画の主体になっていること、つまり、それまでの絵巻に見られた添景としての食から主題としての食になっていること。

(二) 詞書では三人の持論が並置され、対話がないこと。

(三) 詞書は「優劣争い」が主題となつてはおらず、画の構成も他の「論争物」とは大きく異なることや詞書が忠実に絵画化されていないこと。

(四) 主人公が画の中心とはならず、従者や配膳、食事の準備をする人々と並置され、主人公と同等の構成配分がなされていること。

(五) 古典を数々引用するが、作品が創作された時代の「もの尽くし」が特に図像化されていること。

このように、詞書は他の物語のように「優劣争い」の形となつてはいるが、論調は強くはなく、画では人々と食材・食物が並置され、人々も、上下分け隔てなく、画面上に平等に構成配分がなされている。このことから、この絵巻の内容には、様々な争いや

飢饉に苦しんだこの時代の歴史的背景が色濃く反映していると感
じている、

三、文化庁本の翻刻 主要翻刻責任者 クレール・碧子・ブリッセ

(一) 第一段

【翻刻】

1. それ我君の代をおさめ民をあはれみ
2. おはします事漢家の明王聖主の
3. むかしははるかなれはなすらへたてま
4. つるにあたはす本朝の延喜天曆も
5. これにはいか、とおかみたてまつる御め
6. くみのかしこきには民のかまともなき
7. はひぬれはゑみをふくまぬものなくたの
8. しみさかへて頌のこゑのみ耳にみてり
9. さるをこのほと三人のともからよりあひ
10. てをのく心のひくにまかせてあらそふ
11. 一人の男は造酒正糟屋朝臣長持とて
12. 酒を飲ける大上戸なりひとりの僧は
13. 飯室律師好飯とて小つけをこのむ
14. 最下戸なりひとりのをのこは中左衛門

【釈文】

それ、我君の代を治め、民を憐れみおはします事、漢家の明
王・聖主の昔は遙かなれば、準へ奉るに能はず。本朝の延喜・天
曆も、これにはいかと拝み奉る。御恵みの畏きには、民の竈も
賑ひぬれば、笑みを含まぬ者なく、楽しみ栄へて、頌の声のみ耳
に満てり。さるを此の程、三人の輩寄り合ひて、各々心の引くに
任せて争ふ。一人の男は、造酒正糟屋朝臣長持とて、酒を飲みけ
る大上戸なり。一人の僧は、飯室律師好飯とて、小漬を好む最下
戸なり。一人の男は、中左衛門大夫中原仲成とて、酒も小漬も好
む中戸なり。いづれもいづれもとりに言葉を尽くして歌を詠
み、後の世までも思ひ入れたる気色なり。

15. 大夫中原仲成とて酒も小つけもこのむ
 16. 中戸なりいつれもくとりくりにこと葉を
 つくして哥をよみ後の世までも
 18. おもひいれたるけしきなり

(二)第二段

【翻刻】

19. 造酒正長持申様
 20. 酒のいみじき事はみなむかしもいまも
 21. 事ふりぬさけをこのみてのむ人は昔
 22. は封戸もまし／＼き後の世までもかはら
 23. けにならんとちかひし人もあり竹を愛
 24. せし楽天も酒をのめとそ詩につくる別
 25. をおしみし詩の序にも三百盃とそす、
 26. めける桃李の花のさかりには天さへゑ
 27. へるけしきなり花の下にてす、めける
 28. 樽の前なる春の風林間に酒をあたくめ
 29. て紅葉をたくもいとやさし千とせの春の
 30. はしめには屠蘇白散をのみぬればよろつの
 31. 寿命をふくみつ、一里の中にはやまひなし
 32. すへて酒をは百葉の長とそ医師もさた

【釈文】

造酒正長持申様、

酒のいみじき事は皆、昔も今も事旧りぬ。酒を好みて飲む人は、昔は封戸もましましき。後の世までも土器に、成らんと誓ひし人もあり。竹を愛せし楽天も、酒を飲めとぞ詩に作る。別を惜しむし詩の序にも、三百盃とぞ勧めける。桃李の花の盛りには、天さへ酔へる気色なり。花の下にて勧めける、樽の前なる春の風、林間に酒を温めて、紅葉を焚くもいとやさし。千歳の春の初めには、屠蘇・白散を飲みぬれば、万の寿命を含みつつ、一里の中には病なし。すべて酒をば百葉の、長とそ医師も定めける。されば万の祝にも、酒をもちてぞ先とする。元服・渡座・詩歌の会、婿取り・嫁取り・今参り、勝負の座敷に至るまで、酒のなくてはいかげせん。中にも曲水・重陽の、宴会殊に面白し。あるいは浮かぶる鸚鵡盃、あるいは流れの濫觴も、皆盃の故ぞかし。世継の中の言葉にも、光さし添ふ盃は、持ちながらこそ世をば経れ、

33. めけるされはよろつの祝にも酒をもちて
 34. そさきとする元服わたまし詩歌の会むこ
 35. とりよめとりいま、いり勝負の座敷にいたる
 36. まて酒のなくてはいか、せん中にも曲水
 37. 重陽の宴会ことにおもしろしあるいはうかふる
 38. 鸚鵡盃あるいはなかれのらんしやうもみなさか月のゆえそかし世継の中のこと葉にも光さし
 39. そふ盃はもちながらこそ世をはふれ源氏のおとこになりしにもみきとそこれを
 40. す、めけるさ衣の大将二の宮にさかつき
 41. そへてたてまつるなりひら人をつ、みし
 42. にもうちよりさか月いたしつ、わたれとぬれぬとかきつけてちの涙をそなかしける
 43. されはこの世のゑい花には酒に過たる物
 44. そなき糸竹管絃やさしきもさかもりに
 45. こそ興はあれ雪月花をなかめても酒の
 46. なきにはけうもなしされは天神地祇まても酒を供する事そかし人に近づく徳も
 47. あり我身をたつる功もあり心をのふる
 48. 道もありいくらの美物有とても気味と、
 49. のふるれうりまて酒をはなれてかひも

源氏の男に成りしにも、御酒とぞこれを勧めける。狭衣の大将二の宮に、盃添へて奉る。業平人を慎みしにも、内より盃出しつつ、「渡れど濡れぬ」と書き付けて、血の涙をぞ流しける。さればこの世の栄花には、酒に過たる物ぞなき。糸竹管絃やさしきも、酒盛にこそ興はあれ。雪月花を眺めても、酒のなきには興もなし。されば天神地祇までも、酒を供する事ぞかし。人に近づく徳もあり、我身を立つる功もあり、心を伸ぶる道もあり。いくらの美物有とても、気味調ふる料理まで、酒を離れて甲斐もなし。下戸の客人得たるこそ、言葉も心もなかりけれ。会釈なげなる空笑ひ、実法びたる顔付きは、狂ひ合はむと振舞へど、齒噛みてこそは見えわたれ。酔ぬる後は猿眠り、たまたま飲みてはひだるがる顔、唾付きて膝を立て、あるにもあらぬ気色かな。さて又据へたる肴こそ、見苦しきまで失せにけれ。上戸の食はぬ下ろしさえ、人目謀りて忍ばかす。あはれ上戸の好物を、貴き賤しき膝を組み、その盃を取り交はし、三度も五度も過ぬれば、間小深き大茶碗、黒塗り・白塗り・赤漆、わざと作りの大合子、思ひ思ひに始めつつ、占め飲み・荒れ飲み・一口飲み、初春は先づ匂ふなる、梅の花のみいとやさし。秋も末野の草枯れて、露なしうち振り・一文字、魚道なしの振りかつぎ、側差し・平差し・違へ差し・夷懸けとの思ひ差し、贈り肴の色々に、置物・やり物・引出物、管絃・乱舞・白拍子、立舞・居舞・東舞、今様・小柳・撓萩、神楽・

54. なし下戸のまれ人得たるこそこと葉も心
 55. もなかりけれゑしやくなけなるそらわらひ
 56. 実法ひたるかほつきはくるひあはむとふる
 57. まへとはかみてこそはみえわたれ酔ぬる後は
 58. さるねふりたまゝのみてはひたるかるかほ
 59. つはつきてひさをたてあるにもあらぬけ
 60. しきかなさて又すへたるさかなこそみくる
 61. しきまてうせにけれ上戸のくわぬおろしさ
 62. へ人目はかりてしのはかすあはれ上戸の
 63. 好物をたかきいやしきひさをくみその盃を
 64. とりかはし三とも五度も過ぬれはあはひこふ
 65. かき大茶碗黒ぬりしろぬりあかうるしわさ
 66. とつくりの大かうしおもひおもひにはしめつゝしめ
 67. のみあれのみ一口のみはつ春はまつにほふなる
 68. 梅の花のみいとやさし秋も末野の草かれて
 69. 露なしうちふり一文字けうたうなしのふり
 70. かつきそはさしひらさしちかへさしゑひすかけ
 71. との思ひさしをくりさかなの色ゝにをき物
 72. やり物引出物管絃乱舞白拍子たち舞居
 73. まひあつま舞いまやうこ柳しほりはき神楽
 74. 催馬楽そのこまとさるかく物まねいろゝに

催馬楽・其駒と、猿楽・物真似色々々に、声技・骨業・力業、尽さぬ事こそなかりけれ。いかなる歎のある時も、心苦しき折節も、万忘れて心遣る、酒盛りこそはめでたけれ。まして喜びある時は、賀酒とて酒を先づぞ飲む。上戸は酒に惑ひつつ、世様侘しと申せども、生まれ付きたる貧福は、下戸の建てたる蔵もなし。夏六月の暑きにも、霜月・師走の寒きにも、にわかには疝病む時も、酒を飲みてぞ治しける。たとひ失錯したれども、酒に酔いとて許されぬ。もとより我等は凡夫にて、無明の酒に酔しより、覚むる現もえぞ知らぬ。かかる罪悪生死には、中々魚鳥肴にて、酒を飲みたる口にて、弥陀の名号唱ふれば、不論不浄と捨てられず、不簡破戒と嫌はれず。光明遍照十方の、光に乗る事疑はず。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

長持が 新酒も古酒も 酔ぬれば

念仏宗をぞ 深く頼める

75. こはわさほねわさ力わさつくさぬ事こそなかり
76. きれいかなる歎のある時も心くるしき折
77. ふしもよろつ忘れて心やるさかもりこそは
78. めてたけれましてよろこひある時は賀酒
79. とてさけをまつそのむ上戸は酒にまとひ
80. つゝ世さまわひしと申せとも生れつきたる
81. 貧福は下戸のたてたる蔵もなし夏六
82. 月のあつきにもしも月しはすのさむきにも
83. にはかにあた腹やむ時も酒をのみてそなを
84. しけるたとひ失錯したれとも酒にゑいとて
85. ゆるされぬもとより我らは凡夫にて無明の酒
86. に酔しよりさむるうつゝもえそしらぬかゝ
87. る罪悪生死には中く魚鳥さかなにて酒
88. を飲たる口にも弥陀の名かうとなふれ
89. は不浄不浄とすてられす不簡破戒と
90. きらはれす光明遍照十方の光にのる事
91. うたかはす南無阿弥陀仏く
92. 長持か新酒も古酒もゑいぬれは
93. 念仏宗をそふかくたのめる

(三) 第三段

【翻刻】

94. 飯室律師好飯申様
 95. 上戸の徳をあらはして下戸をわろしと
 96. そしれとも飲とのまぬとくらふれは上戸の
 97. とかそつもりぬるまづは佛のみのりにも
 98. 五戒の中には不沽酒戒さけをはうらす
 99. のみもせずいつれの内外の転籍か酒を
 100. のめとはをしへたる漢の高祖は盃をすて、
 101. そ項羽にはかられぬ殷紂のほろひし有
 102. さまは酒のいつみのゆへそかし長安倡家の
 103. むすめこそ琵琶のひきよくも忘つゝ酒ゆへ
 104. 身をはすてはてし源氏のすまになかされ
 105. し其みなもとをたつぬれはおほろ月夜
 106. のかむの君ゑい心ちにそ逢そめし藤大納
 107. 言の北の方正月一日の引出物酔くるひに
 108. そとりいてし人をあやまつ方便にすゝむる
 109. 酒そおそろしきさても上戸の御れうをは
 110. くはてもやまぬ物ゆへにおほくの米穀く
 111. さらかし酒に造るそついへなる酒屋ことに
 112. はとにかくにをきのりのみて後は又酒直

【釈文】

飯室律師好飯申様、
 上戸の徳を表して、下戸を悪しと謗れども、飲むと飲まぬと比ぶれば、上戸の咎ぞ積もりぬる。先づは仏の御法にも、五戒の中には不沽酒戒、酒をば売らず飲みもせず。いづれの内外の典籍か、酒を飲めとは教へたる。漢の高祖は盃を、捨ててぞ項羽に謀られぬ。殷紂の滅びし有様は、酒の泉の故ぞかし。長安倡家の女こそ、琵琶の秘曲も忘れつつ、酒故身をば捨て果てし。源氏の須磨に流されし、その源を尋ねれば、朧月夜の官の君、酔い心地にぞ逢初めし。藤大納言の北の方、正月一日の引出物、酔狂ひにぞ取り出でし。人を誤つ方便に、勧むる酒ぞ恐ろしき。さても上戸の御料をば、食はでも止まぬ物故に、多くの米穀腐らかし、酒に造るぞ費へなる。酒屋ごとにはとにかくに、賒り飲みて後は又、酒直(値)を迫る折々に、腹立怒るぞ謂はれなき。酒手なしとて自づから、飲まぬ日数も過ぬれば、味気なげなるあはれさは、妻子の別れに異ならず。そぼろ酔たる時は又、家の中には入り猛り。人に会ひては僻みつつ、すね言・繰り言・ねまり言、目様・顔様・姿様、うつつなげなる顔付きは、言ふばかりこそなかりけれ。遊行上戸の癖として、よろほひよろほひ歩きつつ、堀江・厠に落入て、手足・はき物・具足まで、取り所なく汚しつつ、苦笑

113. をせむるおり／＼に腹立いかるそいはれなきさ
 114. かてなしとてをのつからのまぬ日数も過ぬれ
 115. はあちきなけなるあはれさは妻子の
 116. わかれにことならずそほろ酔たる時は又
 117. 家の中にはいりたけり人にあひては
 118. ひかみつゝすね事くりことねまりこと目やう
 119. かほやう姿やううつゝなけなるかほつきは
 120. いふはかりこそなかりけれ遊行上戸のくせ
 121. としてよろほひ／＼ありきつゝほりえかは
 122. やに落入て手あしはき物具足までとり
 123. 所なくよこしつゝにかわらひたるけしき
 124. こそにくさに過てきたなれさて又馬こ
 125. し車までのりもたまらすおちころひ従者
 126. をしかるそふしやうなるあかみ上戸のかほつ
 127. きは酒のはむとこそおほえたれむら／＼
 128. あかみのはなしろはおもてかたにそ似たりける
 129. のむとはしりてそこもなくあをみわたるも
 130. おそろしやさすかつまりてこわき時おんはくはか
 131. りにうか／＼と大さか月をひかへつゝのむとは
 132. すれと入もせずさかなましりにつきいたし
 133. はたとひとしくなるみれはこゝちかへさぬ人そ

ひたる気色こそ、憎さに過て汚なけれ。さて又馬・輿・車まで、
 乗りもたまらず落ち転び、従者を叱るぞ不浄なる。赤み上戸の顔
 付きは、酒の盤とこそ覚えたれ。村々赤みの鼻白は、面形にぞ似
 たりける。飲むと走りて底もなく、青み渡るも恐ろしや。さすが
 詰まりて強き時、陰魄ばかりにうかうかと、大盃を控へつつ、飲
 むとはすれど入もせず。肴交りにつき出だし、肌と等しくなる
 見れば、心地返へさぬ人ぞなき。かかる上戸の口の香は、唾臭・
 生臭・地腹臭、すゑり臭げな汚さは、他所の鼻まで堪へがたや。
 かくて酔いたる有様は、万の人に曝されて、笑はれ種になるのみ
 か、振る舞ひ過ごす事多し。言ひ過したる事もあり、よからぬ様
 なる酔狂ひ、人を害する事もあり。前後も知らず酔い惚れて、命
 を失ふ事もあり。あまり酔たる時は又、足手も更に萎へ果てて、
 僅かに息は通へども、人の正体更になし。親しき疎き集りて、水
 茶・粟粥・茗荷の根、搗き搾りつつ飲ませよと、慌て騒ぐも浅ま
 しや。さて又酔いの覚め方に、有し事ども恥づかしや。二日酔す
 る朝こそ、作り病に成りにけれ。かかる有様思ふにも、下戸に過
 たる者ぞなき。殊更祝いの座敷にも、先は御料を参らす。元
 服・渡座・婿取りの、祝いにいづれも御料あり。大臣の大饗行ふ
 は、開口にだに有がたし。二本・三本・五本立て、本飯・復飯、
 据へ御料、鳥の子握りのわか御料、玉を磨ける杉御料、粟の御料
 の色濃きは、女郎花にぞ似たりける。桃花の宴の赤飯は、花の色

134. なきかゝる上戸の口の香はつくさなまくさ
 135. しはらくさすゑりくさけなきたなさはよそ
 136. のはなまてたへかたやかくてゑいたる有
 137. さまはよろつの人にさらされて笑はれくさに
 138. なるのみかふるまひすこす事おほしいひ過
 139. したる事もありよからぬさまなる酔くるひ
 140. 人を害する事もあり前後もしらすゑいほ
 141. れて命をうしなふ事もありあまり酔たる
 142. 時は又あし手もさらになへはてゝわつかにい
 143. きはかよへとも人の正たい更になししたしきうと
 144. きあつまりて水茶あはかゆみやうかのねつ
 145. きしほりつゝのませよとあはてさほくも
 146. あさましやさて又ゑいのさめかたに有し
 147. 事ともはつかしや二日酔する朝こそつくり
 148. やまひに成にけれかゝるありさま思ふに
 149. も下戸に過たる者そなきことさら祝のさし
 150. きにも先は御れうをまいらす元服わた
 151. ましむことりの祝にいつれも御料あり大臣
 152. の大饗をこなふはかいこうにたに有かたし
 153. 二本三本五本たて本飯復飯すへ御れう
 154. 鳥の子にきりのわか御料玉をみかけるすき

かや映るらん。夏は涼しく覚えける、麦の御料も珍しや。地藏
 頭の高飯は、六道の値遇頼もしく、四季折節の生珠は、茎立ち・
 筍・茗荷の子、松茸・平茸・滑薄、熟汁・小汁・冷しつけ、調味
 あまたに仕替へつつ、うそうそけ入の薄小漬、良き程らかの小
 再進、御前に据へてみたらばや、参らぬ上戸やおはします。その
 後餅色々に、弥生も初めの若草は、父子・母子の母子餅、手作り
 柄に幼気や、変はらぬ色の松餅、千世とぞ君を折りける。煩惱の
 絆切り餅、菩提に勧む便りあり。命は水の粟餅、世の徒なるも知
 られけり。五月五日の粽には、屈原が昔思ひ出、冬の初めの祝ひ
 には、猪子と名付くる搔餅、秋の鹿にはあらねども、紅葉を敷く
 もいとやさし。青陽の春の初めには、貴き賤しき押し並べて、殊
 更鏡の祝にぞ、千年の影をば映しける。神社何れの御願寺も、壇
 供の餅据へてこそ、修正の行ひありと聞け。さて面白き遊びに
 は、本比・十服・包み入れ、抜き出し百服・衆儀・批判、木先・
 名目・走摘、洞香・清香・真壺・片木、無上の小壺に引き入て、
 唐物・国物・作り物、様々見物据へ並べ、静かに遊ぶ茶の会は、
 酒盛りよりも面白や。仏法修行の下木にも、酒を飲までぞ頼みあ
 る。戒を保たぬ人は皆、心の馬も静まらず。酔て忘し無価の珠、
 これ又酒の咎ぞかし。静かに法華を誦誦して、火宅の衆生諸共に、
 大白牛車に乗てこそ、常寂光土へ行べけれ。南無妙法蓮華経。

好飯は 五味の調熟 事旧りて

175. 174. 173. 172. 171. 170. 169. 168. 167. 166. 165. 164. 163. 162. 161. 160. 159. 158. 157. 156. 155.
- 御料粟の御れうの色こきはをみなへしにそ
似たりける桃花の宴のあか飯は花の色かやう
つるらん夏は涼しくおほえける麦の御れうも
めつらしや地藏かしらの高飯は六道のちくた
のもしく四季おりふしの生珍はく、たちたかん
なみやうかの子松たけひらたけなめす、き
あつしるこしるひやしつけ調味あまたに
しかへつ、うそくけ入のうす小つけよきほとら
かの小さいしん御まへにすへてみさうはやまいら
ぬ上戸やおはします其後もちる色く、にやよ
ひもはしめのわか草はち、こは、このはう子もち
手つくりからにいたるけやかはらぬ色のまつ
もちる千世とそ君をいのりけるほんなうの
きつなきりもちる菩提にす、むたより
あり命は水のあはもちる世のあたなるもしら
れけり五月五日のちまきには屈原かむかし
おもひ出冬のはしめのいはひにはゐることなつく
るかおもちる秋の鹿にはあらねとも紅葉をし
くもいとやさし青陽の春のはしめにはたかき
いやしきをしなへてことさらかかみの祝にそ千とせのかけ
をはうつしける神社いつれの御願寺も壇供のもちる

猶味は、む 法喜禅悦

176. すへてこそ修正のをこなひありときけさて面白き
 177. あそひには本比十服つゝみいれぬき出し百ふく衆
 178. 儀ひはんこさき名目はしりつみ東かうせいかうまつほ
 179. へき無上の小つほにひき入てから物こゝ物つくり物
 180. さまゝけん物すへならへしつかにあそふ茶の会は酒
 181. もりよりも面白や仏法修行のしたきにも酒を
 182. のまてそたのみある戒をたもたぬ人はみな心のむ
 183. まもしつます酔て忘しむけの珠これ又酒の
 184. とかそかししつかに法華を誦誦して火宅の衆生
 185. もろともに大白牛車に乗てこそ常寂光土へ
 186. 行へけれ南無妙法蓮華經
 187. 好飯は五味の調熟事ふりて
 188. なをあちはゝむ法喜禪悦

(四) 第四段

【翻刻】

189. 中左衛門大夫仲成申様
 190. 上戸も下戸もさまゝに其徳あまたきこゆ
 191. れと世間出世になすらへて中戸にすぎたる
 192. 物そなきあまりのまぬも興もなしさまてに

【釈文】

- 中左衛門大夫仲成申様、
 上戸も下戸も様々に、その徳あまた聞こゆれど、世間出世に準
 へて、中戸に過ぎたる物ぞなき。あまり飲まぬも興もなし。さま
 でに飲むも夥し。されば年初めの祝ひにも、殊更三度飲むぞか

213. 飲もおひた、しされは年始のいはひにも
 212. 殊更三度のむそかし世にうとまる、大上戸
 211. あしきけしきのゑいくるひさて又座敷の
 210. 無興なる下戸の口つきすさまじや大食
 209. 上戸のちかかつへむかしもいまもあらにくや仏の
 208. をしへ信すへし凡夫のかたにもすちかはて
 207. この世の栄花もひらけたり後生のまこと
 206. もそなはれり持戒の中にもをつからゑい
 205. さるほどをゆるせとて一盞はしむる人を
 204. こそ一かう断酒のひしりよりまさりてたう
 203. とくおほえけれされは中戸のふるまひは飯
 202. をも酒をもよき程にすへならへつゝのみく
 201. ひて一期はかくてそよかりけるよろつ
 200. いはひあそひにも酒のなきには興もなし呪師
 199. しな玉のくるひまで酒をのまねはしらけ
 198. たりすまうたかへしちからもちひたるく成
 197. てはかひもなし夏のあつくてかなしきにふる
 196. 酒一度は氣力あり冬のさむくてこゝへたる
 195. はしかみ入たるわかし酒のめは風こそよりつ
 194. かね食前食中食後までよきほとらかの小
 193. 盃心にまかせてのみたるはまことに薬とお

し。世に疎まるる大上戸、悪しき気色の酔い狂ひ。さて又座敷の
 無興なる、下戸の口付き凄まじや。大食・上戸の近餓へ、昔も今
 もあら憎や。仏の教へ信すべし。凡夫の方にも筋違はで、この世
 の栄花も開けたり、後生の真も備はれり。持戒の中にも自づか
 ら、酔いざる程を許せとて、一盞始むる人をこそ、一向断酒の聖
 より、勝りて尊く覚えけれ。されば中戸の振る舞ひは、飯をも酒
 をも良き程に、据へ並べつつ飲み食ひて、一期はかくてぞ良かり
 ける。万の祝ひ・遊びにも、酒の無きには興もなし。呪師・品玉
 の狂ひまで、酒を飲まねば白けたり。相撲・手返・力持ち、饑く
 成ては甲斐もなし。夏の暑くて悲しきに、古酒一度は氣力あり。
 冬の寒くて凍へたる、薑入たる沸かし酒、飲めば風邪こそ寄り付
 かね。食前・食中・食後まで、良き程らかの小盃、心に任せて飲
 みたるは、誠に薬と覚えたり。食過たるもあら苦し、酒の酔へる
 もいと侘し。されば万の事は皆、中に過たる事ぞなき。器量・芸
 能・品・種姓、才智・才学・詩歌の方、神や仏の利生まで、良き
 程とこそ折けれ。人の貧福考へて、初・中・後年の間にも、中年
 良きぞ頼もしき。齡の程もさこそげに、老人見るも恐ろしや。襦
 袢の中に包まるる、赤子の気色幼し。十七・八、九の程こそは、
 誠に盛りの程なれや。心遣ひも同じ事、氣も過たるも取り苦し。
 正躰なきも痴がまし。中なる人の心こそ、長き友には良かりけ
 れ。太れる人も見苦しや。瘦せたるも又貧相し。丈の高きも見苦

214. ほえたり食すきたるもあらくるし酒のゑへ
 215. るもいとわひしされはよろつの事はみな中
 216. に過たる事そなき器量藝能しな種姓才智
 217. さい学詩哥のかた神や佛のりしやうまで
 218. よき程とこそ祈けれ人の貧福かむかへて
 219. 初中後年のあひたにも中年よきそたのものし
 220. きよはひの程もさこそけに老人みるもお
 221. そろしやむつきのなかにつゝまるゝあか子のけし
 222. きいとけなし十七八九のほどこそはまことに
 223. さかりのほとなれや心つかひもおなし事きも
 224. 過たるもとりくるし正躰なきもをこかまし中
 225. なる人の心こそななき友にはよかりけれふと
 226. れる人もみくるしややせたるも又貧さうし
 227. たけのたかきもみくるしやよきほとらかのこ
 228. さふらひちうくとある宮つかひつきしくそ
 229. おほえける四季おりふしのあひたにもあつ
 230. くさむきもたへかたや春と秋とはのとか
 231. にてかたひら小袖あなちいらぬさへこそよ
 232. かりけれ世のわたらひを思ふにも日てりの
 233. 時は物やけぬあまりふりては水出ぬ枝を
 234. ならさぬ風のをと土くれやふらぬ旬の雨堯舜

しや、良き程らかの小侍、中々とある宮使ひ、つきつきしくぞ覺
 える。四季折節の間にも、暑く寒きも堪へ難や。春と秋とは長
 閑にて、帷子・小袖強ちに、要らぬさへこそ良かりけれ。世の渡
 らひを思ふにも、日照りの時は物焼けぬ。あまり降りては水出
 ぬ。枝を鳴らさぬ風の音、土塊破らぬ旬の雨、堯舜の代のいみじ
 さは、民の竈も賑はひぬ。されば名高き智者達も、天長地久の
 御祈、良き程とこそ祈誓すれ。そもそも中にて良き物は、細橋・
 荒道・沖の石、船の帆柱・濤標。良き事したる中人の、小馬に乗
 るさへ有り難し。中納言の中將は、並べての人の成らぬ官。中務
 卿氣高しや。上臈・下臈の間にも、中臈無くては物足らず。都の
 辺りに嵯峨の釈迦、中に立ちてぞおはします。極楽浄土の中心
 に、当たりて立てる天王寺、転法輪寺の薬師をば、中堂にこそ安
 置すれ。「ふりさけみれば」と詠じける、安倍仲丸いとやさし。
 詩歌にその名を得たりしは、前後に聞こえし中書王、大梵王のめ
 でたきも、中の程にぞ住み給ふ。五天竺国広けれど、中天竺に当
 たりてぞ、仏は出世し給し。十方浄土の化仏まで、虚空の中にぞ
 現じける。九品生には中々品、五智の如来は中勝れ、三諦即是の
 観心は、中道観にぞ留めける。されば上戸も下戸も皆、中道離
 れぬ物なれば、酒と見つるも酔いにけり。飯と思ふも空なれば、
 我身離れて悟り無し。心の外には仏無し。自性法身現れて、即身
 成仏疑はず。南無三宝く

235. の代のいみしさは民のかまともにはきはひぬされ
236. は名たかき智者たちも天長地久の御祈よ
237. き程とこそきせいすれそもく／＼中にてよき
238. 物はほそ橋あら道おきの石船の帆はしら
239. みをつくしよき事したる中人の小馬にのる
240. さへありかたし中納言の中将はなへての人の
241. ならぬ官中務卿けたかしや上臈下らうのあ
242. ひたにも中臈なくては物たらす宮この
243. ほとりに嵯峨の釈迦中にたちてそおはし
244. ます極楽浄土の中心にあたりてたてる
245. 天王寺転法輪寺の葉師をは中堂にこそ
246. 安置すれふりさけみれはと詠しける安倍
247. 仲丸いとやさし詩哥にその名を得たり
248. しは前後にきこえし中書王大梵王のめて
249. たきも中の程にそすみたまふ五天竺国ひ
250. ろけれと中天竺にあたりてそ仏は出世し
251. 給し十方浄土の化仏まで虚空の中にそ
252. 現しける九品生には中々品五智の如来は中
253. すくれ三諦即是の観心は中道観にそ
254. と、めけるされは上戸も下戸もみな中道
255. はなれぬ物なれば酒とみつるもゑいにけり

世中に 住む仲成が 心中に
中道の理を 悟りぬる哉

256. 飯と思ふも空なれば我身はなれてさとり
 257. なし心の外には仏なし自性法身あらは
 258. れて即身成仏うたかはす南無三宝く
 259. 世中にすむ仲成か心中に
 260. 中道の理をさとりぬる哉

四 おわりに

この翻刻および積文は「フランス国立図書館写本室やフランス国内に所蔵される江戸時代における日本物語絵写本」研究プロジェクトメンバーが中心となり行ったものであり、全ての研究成果はこのメンバーに帰属するものである。翻刻および積文メンバーとして、日本側は筆者、立教大学名誉教授小峯和明、名古屋大学文学研究科三好俊徳、パリ・デイドロ大学名誉教授ジャクリーヌ・ビジョー、同大学クレール・碧子・ブリッセ、マチアス・ハイエク、フランス国立東洋言語文化大学ジュリアン・フォーリー、フランス国立人間科学研究所ジャンヌコビー、フランス国立高等研究院シャルロット・フォン・ヴェアシユアを中心として名を挙げるが、フランス国立東洋言語文化大学エステル・レジェリールボエール氏、フランス国立図書館主任研究員ヴェロニッ

ク・ペランジェ氏などの協力がなければ、成し得なかつたことを記し、篤くお礼を申し上げる。なお、詳細な注釈は改めて明らかにしたいと考えている。

「酒飯論絵巻」伝本リスト

- 1 文化庁蔵 一軸 一卷 紙本着色 30.8 × 141.6 cm 表紙(原表紙) 浅黄地に花のような模様刺繍 見返し 金銀の霞と砂子、切箔、野毛 料紙 鳥の子 16世紀中期 『角川絵巻物総覧』および『日本美術全集』12巻に榊原悟氏による解題有り。「酒飯論絵巻考—原本の確定とその位置付け—」(『美學』45—1 並木誠士 1994)が指摘するN家A本を文化庁が2002年に買い取った絵巻。
- 2 文化庁蔵 一軸 一卷 紙本墨画 30.2 × 81.2 cm 外箱シー

- ルに「白描 酒飯論絵巻 平野文庫旧蔵」内題 「文政三
辰年十二月 三論絵写」表紙 赤銅色?の地に模様刺繍 見
返し粗紙 料紙 鳥の子 白描 色指示有り 内題と奥書
にのみ字あり、詞書なし 紙継に二種類の朱印「平野文庫」、
「別當富嗣」。
- 3 静嘉堂文庫美術館蔵 一軸一卷 紙本著色 17.5 × 1297.4
cm 外箱「酒飯論 土佐光元筆」内箱「酒飯論 詞書 宮土佐光
元筆 猪苗代兼載 住友内記 屋代太郎 両筆」外箱裏「山名貫
義誌(印)」内箱裏「土佐光元筆 住友内記誌(印) 詞兼載
筆文化四季源弘賢観」表紙(後表紙)濃紺地に金の唐草と銀
の桐と龍 見返し 金銀の雲と砂子料紙 鳥の子 絵は土佐
派系。
- 4 国立国会図書館蔵(B本) 一軸一卷 紙本墨画 一部著色
色指示有 巻末に住吉内記(1770~1777年による「絵土佐
光元筆 詞兼載法師筆」の記載 絵は土佐派系。『室町時代
物語 大成』第七巻に翻刻有り。国会図書館デジタルアーカイ
ブで全部分を公開 (<http://opac.ndl.go.jp>)。
- 5 個人蔵 一軸一卷 紙本著色 28.7 × 713.2 cm 桃山時代
詞書無し 箱の蓋裏に「酒飯論 海舟先生寄贈 誠織」と記
される。徳川美術館 蓬左文庫秋季特別展、美術館編 名古
屋・徳川美術・2006.p.31『絵で楽しむ日本むかし話』お伽
- 6 草子と絵本の世界』に一部カラー図版で紹介有り。
茶道資料館蔵 一軸一卷 紙本著色 34.4 × 1393.6 cm 表
紙(原表紙)藍地に菊花と模様の金糸刺繍 見返し(原見返
し)正繫ぎに菊花、複数種の葉と宝尽くし 料紙鳥の子 江
戸時代後期 茶道資料館友の会会報『茶窓』で紹介文、詞書
翻刻、訳文有り(文化庁本詞書と大きな相違有り)。
- 7 茶道資料館蔵 一軸一卷 紙本墨画 32.7 × 599.9 cm 表
紙鶯地に左右対の鳳凰金糸 見返し(後見返し)無紋粗紙
料紙鳥の子 色指示あり(漢字、平仮名、片仮名 平仮名と
片仮名は別筆) 欠損有り 室町後期~江戸初期。
- 8 三時知恩寺蔵 一軸一卷 紙本著色 江戸時代 並木誠士
(1994)に指摘有り。
- 9 チェスター・ビーターイ図書館本 一軸一卷 紙本著色 34
× 1200 cm 近世前期写『チェスター・ビーターイ・ライブ
ラリー 絵巻絵本解題目録』(Descriptive Catalogue of Japanese
Illustrated Manuscripts and printed books in the Chester Beatty
Library) 2002年 並木誠士(1994)に指摘有り。
- 10 個人蔵 一軸一卷 紙本墨画 色指示有り 「三論絵写」、嘉
永三年(1860)模写。
- 11 個人蔵 一軸一卷 紙本墨画 部分的色指示有り。並木誠士
(1994)に指摘有り。T家本。

- 12 国立国会図書館 (A本) 一軸一卷 36.2 cm 紙本著色 「僧家風俗図巻」と記される。詞書無し 錯簡有り (一段、四段、二段、二段) 国会図書館デジタルアーカイブで大部分を公開 (<http://opac.ndl.go.jp>)。並木誠士 (1994) に指摘有り。
- 13 国立国会図書館 (C本) 一軸一卷 41 cm 紙本淡彩 国会図書館デジタルアーカイブで大部分を公開 (<http://opac.ndl.go.jp>)。並木誠士 (1994) に指摘有り。
- 14 中野幸一氏蔵 二軸二巻 32.5 × 396 cm、32.5 × 597 cm 江戸時代中期書写 (文化庁本詞書と大きな相違有り)。
- 15 個人蔵? (2001年3月にクリステイーズオークションに出展される: Christies 9606) 紙本著色 34.7 × 826.7 cm 室町後期 詞書無し。
- 16 フランス国立図書館写本室蔵 一軸一卷 紙本著色 31.1 × 732.5 cm 表紙: 雷竜模様濃紺表紙 題簽左肩金地書名なし 見返し: 金箔ちらし 用紙: 鳥の子紙 江戸中期 詞書無し。フランス国立図書館デジタルアーカイブで大部分を公開。
- 17 ニューヨークパブリックライブラリー・スペンサーコレクション蔵 一軸一卷 紙本著色 江戸中期 狩野探信のサイン有り。Sorimachi, Shigeo. Catalogue of Japanese illustrated books and manuscripts in the Spencer collection of New York Public Library. -1978。
- 18 大英博物館蔵 一軸一卷 紙本著色 36 × 1187.15 cm 江戸中期? 錯簡有り 詞書無し。
- 19 早稲田大学図書館蔵 (請求記号: チ 04 00510) 1冊 紙本墨画 28 cm 一部朱書 題簽に「三論絵詞と有り。嘉永三年 (1850)、吉田元陳模写。並木誠士 (1994) に指摘有り。
- 20 個人蔵 (N家B本) 一軸一卷 紙本墨画 色指示有り 文政三年 (1820) 「三論絵写」並木誠士 (1994) に指摘有り。
- 21 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵 (泉景文庫) 一軸一卷 紙本墨画 39 × 1020 cm 一部着色 「酒飯記」と記され、土佐光信筆、佐々木泉玄 (1805~1879) 模写とされる。並木誠士 (1994) に指摘有り。
- 22 東京国立博物館蔵 一軸一卷 紙本著色 40.4 × 1537.7 cm 題簽「下戸上戸絵詞 古法眼 一卷」表紙 (後表紙) 無地紙 見返し粗紙 料紙 鳥の子 江戸末期 狩野養信模写。
- 23 東京国立博物館 三論写し 碁を打つ稚児と僧 24.0 cm 石で遊ぶ子供 14.0 cm
- 24 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵 (加越能文庫) 形態不明 「酒食論」。
- 25 愛媛県歴史文化博物館蔵 一軸一卷 紙本淡彩 34.5 × 826 cm 江戸後期 詞書無し。

- 26 京都大学蔵 一軸一卷 紙本著色 「三論絵詞」と有り。大正三年(1914)高山青嶂模写 並木誠士(1994)に指摘有り。
- 27 東京文化財研究所蔵 一軸一卷 紙本墨画 白描、初めのみ色指示有り 題簽(後のもの) 「三論繪詞(酒食論)」内題なし(見返しに美術院の印あり) 表紙(後表紙)紺地に白い泡模様(印刷?) 見返し粗紙 料紙 楮紙。
- 28 慶應義塾大学魚菜文庫(旧称石泰文庫)蔵 形態不明 詞書無し。
- 29 西尾市岩瀬文庫蔵 一冊 版本 「三論絵詞」と有り。原題簽存(左肩单边)、題簽下部に「上戸 造酒正長持 冷泉為榮 卿作/下戸 飯室律師好飯 櫛笥隆望卿作/中戸 中左衛門大夫仲成 交野時長(ママ) 卿作/絵 吉田法橋元陳筆。明和年間[1764~1771]に、絵は吉田元陳、文は冷泉為榮などが写した模本を、更に斎藤彦麿が模写した本。早稲田大学蔵『三論絵詞』は岩瀬本に基づく江戸期の転写本。印記「巨万津曾能乃於斯伝」「栢木之印」。卷等に斎藤彦麿による自筆の附記有り。
- 30 ギメ美術館蔵 一軸一卷 紙本著色 29.5 × 990.1 cm 薮関月筆 1846年。
- 31 神宮文庫蔵 一冊 紙本墨画(版本かどうかは不明) 絵無し。並木誠士(1994)に指摘有り。
- 32 群馬県立歴史博物館蔵 一軸一卷 紙本著色 江戸中期「三論絵詞」
-
- 一 飯が好きと「杉盛り」、つまり飯を山盛りに盛る意味の比喩である。
- 二 論文末に伝本資料を掲載する。
- 三 冬から春に栽培された「浮な蕪」の若菜と思われる。
- 四 橘、九年母、柚子、蜜柑、仏手柑、金柑などの精と栗、梨、梅、柘榴、棗、桃などの精が擬人化されている。
- 五 金文京「東アジアの異類論争文学」『文学』十一、十二月号、『漢字文化圏を読み直す』、43頁、岩波書店、二〇〇五年。
- 六 山岸徳平「三論絵詞とその本文」、『説話文学研究』、四二五~四三一頁、有精堂出版、一九七一年、および、並木誠士「酒飯論絵巻考」、『美学』45号(1)、一九九〇年。宗論としては、浄土宗と法華宗の間で行われた天正七年(一五七九)の安土宗論は特に名高く、法華宗は敗れて処罰者を出している。
- 七 この狂言にも、芋茎、麩、独活、木の芽漬、ごぼうはんぺん、煎り昆布、塩などの料理の材料が記される。また、このような食の話題から相互が仲良くなるのも象徴的と考えている。
- 八 『祇園執行日記』享祿五年(一五三二)七月二十七日の条、同じく八月の条(七月二十九日に天文元年と改元)、『二水記』(同年同月)、『言繼卿記』(同年八月十九日の条、および天文二年十二月の条)、『御ゆとの上の日記』(天文二年十二月の条)、『鹿苑日録』天文五年(一五三六)七月の条などに、法華宗と一向宗または、天台宗徒との争いが記されている。